



激戦のGT300クラスに新たなる刺客登場!

デビュー戦でいきなり善戦 目標の今季一勝は間近!?

バラエティに富むGT300クラスに、また新たなマシンが登場した。セダンのレックスIS350をベースに、ミッドシップレイアウトを採用するこのユニークなマシンは、デビュー戦でいきなりシングルフィニッシュを遂げ、一躍注目を集めることとなった。

文：川合央助 撮影：佐藤正勝



↑ 竹内と坂東の2台のIS350が走る。2台は全く同一の仕様とはなっておらず、細部がそれぞれ違っている。

4 ドアセダンのミッドシップにフォアミッド・ニッポン用のV8エンジンを搭載するというユニークな成り立ちで、開幕前から話題を集めていたIS350。4月の第2戦に1台が姿を現したものの出走はかなわず、5月の第3戦富士が2台揃っての実戦デビューの場となった。

結果はウェッズスポーツIS350（織戸学/阿部賢）が9位。グリーンテック・コムホースIS350（黒澤琢弥/井口卓人）は、破損したインナーフェンダーの修復のため長いピット作業を余儀なくされ、規定周回数不足でリタイア扱いとなったものの、最後まで走りきってチェッカーを受けた。両チームとも、この結果に満足はしていないだろうが、製作開始からデビューまでの期間の短さを考えれば、完走できただけでも驚異といえるのではない。



↑ 前日は徹夜で作業を手伝ったという織戸選手（左）。パートナーは、昨年ボルシェカップに出場していた阿部賢選手。

そもそもこのクルマの構想がスタートしたのは一昨年。当時、3スターボ搭載のセリカで戦っていたチーム・タケウチとレーシング・プロジェクト・バンドウが、次期マシンを模索する中で浮上してきたものだ。ただし、この時点ではミッドシップ化やV8エンジンの搭載は考慮されておらず、あくまで「ベース車」としてIS350を使いたい。竹内浩典チーム・タケウチ代表という話だった。その後さまざまな紆余曲折を経て、ようやく「ゴ・サイン」が出されたのが昨年末。実際に設計図が出来上がったのは今年に入ってからだったというから、実質的な製作期間は3ヶ月足らずということになる。

ことに製作の順番が後になったバンドウのクルマは、組み始めてから2週間ですでに状態にまで持っていたという。作業に当たったタケウチを中心に、数多くのレーシングガレージの協力がなければ実現しなかったと、坂東正敬監督は振り返る。「大変だったのは」とにかく時間がないことと、物がなかなか揃わなかったこと。例えばドアは来たけどドアの受けがないとか、ラジエターはあるけど

ラジエターのボックスがないとか……。どうにか走れる形に組み上がったのはレースウィークの金曜日。最後はドライバークの織戸も徹夜で手伝ったという。タケウチのクルマとバンドウのクルマでは、基本設計は同一だが細部が若干異なっている。パツと見てすぐにわかるのはタイヤメーカーの違い。そのほか、ホイール、ダンパー、ブレーキ、リアウィングなどもそれぞれ別のパーツを使用する。さらに、GT500マシンからの流用パーツに年次の違いなどもあり、細かく観察するとかなりの違いが発見できるはずだ。

タイヤに関しては、両チームともとりあえずは既存スペックの流用。ヴィーマックなど、ミッドシップ車両に合わせたものを使っている。今はそれで不具合はないようだが、今後の結果次第では専用のものを開発する、という話になってくるだろう。

エンジンも、今のところはGT300のリストリクターに合わせたモディファイのみ。（リストリクターの影響で）回転の頭打ちが早い一方、低回転ではトルクが不足する。竹内代表という状況にあり、さらなる煮詰めが必要ではあるようだ。ただしポテンシャルは相当に高く、これからの開発によって速さを発揮してきそう。一方、燃費は現状でも悪くなく、500kmレースを1回ピットで走りきっている。

両チームとも、当面の目標は今年中の優勝。ことに燃費の良さが生きる鈴鹿1000kmや、その前の菅生戦をターゲットに見据えている。

エクステリアからは想像がつかないメカニズム



↑エンジンをミッドに搭載するため、ドライバーのポジションはやや前側へ移動されている。ステアリングの位置は限りなくセンターに近い場所にレイアウトされる。重量バランスを考慮したものと思われる。



↑本来エンジンのあるべき場所には、傾斜された形で収まるラジエターと、サスペンションを構成するパーツ。



↑リアのピラーは形を残すためにある模様。今後エンジンや足周りの熟成が進めば、トップグループと互角に渡り合えるマシンとなるに違いない。



↑リアドアを開けると目の前にあるのがエンジン。V8の3.0ユニット(RV8J)はフォーミュラニッポンに搭載されるものと同一である。



↑インプレッサに続いて登場したセダンのマシン。リアセクションにDTM風のフィンが装着される。



↑IS350の原型が残っているのは、ルーフと一部のモノコック。前後セクションはパイプフレームで構成される。サスペンションなどは05年型のスープラから流用されているという。